

モブトラマンの怪獣墓 場滞在記

クォーターシエル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クライシス・インパクトによつて怪獣墓場学園に飛ばされた若き宇宙警備隊隊員見習いの話。

※例によつてタグが増減する可能性があります

目次

1 話	モブトラマンは目覚める	1
2 話	学生生活二日目又はウルたまロメ	
オ	――	14
3 話	遠足に行くようだ	25
4 話	初めての地球	35
5 話	再び地球へ	43
6 話	怪しい隣異星人	57

1話 モブトラマンは目覚める

ここは怪獣達の魂が眠る怪獣墓場の一角。

ある建物の一室で寝かされていた1人の青年が目を覚ました。

「……………地球だと、こういう時、『知らない天井だ』って言うんだっけ……」

ベッドに横たわったままの青年は辺りに視線を動かしながらそう呟く。

「……どこだろう、此処。もしかして地球なのか？あの戦いはどうなったんだ？」

青年は自分が目覚める前の経緯を振り返る。



俺の名はロメオ。M78星雲光の国・宇宙警備隊の訓練生だ。

一人前の宇宙警備隊隊員を目指し、日々養成所で勉強や訓練を行っていた矢先ある事件が起きた。

嘗て光の国を壊滅寸前に迫りやっめたこともあるウルトラ族の数少ない大罪人である男、ベリアルが軍団を率い我が故郷と縁深き星「地球」へと大規模な侵攻を行ったのだ。

すぐさまに宇宙警備隊はこれを迎え撃つべく地球へ向かい、さらにウルトラ兄弟の一人、ウルトラセブンの息子であるゼロの率いるウルティメイトフォースゼロも参戦する大激戦が行われた。

しかし、力を蓄えたベリアルは強大で戦いは次第に劣勢となり、遂には宇宙警備隊は地球から一時撤退することとなってしまった。

更に勢いづいたベリアルは「超時空消滅爆弾」なる兵器を持ち出し地球が破壊されてしまった…と此処までは覚えているのだが、自分はなぜこんな場所で寝ていたのだろうか？

あの時自分も後方支援を志願して地球の近くに居て恐らくは破壊の余波に巻き込まれたようなのだが。

自分は身体を起こす。その時あることに気づいた。

「あれ？俺の姿…地球人になってる？」

そう、自分の姿が地球人になっている。そもそも我々ウルトラ族の大昔の姿は地球人と大体同じだったそうで、その為元々そういう姿になる能力もあるのだが。

この部屋も破壊されてしまった地球の様式そっくりだしどうということなのだろう。

そんなことを考えていると、

—気づいたようだねロメオ—

「!誰だ!」

テレパシーのような声が聞こえたので振り向くと、そこには赤い球体が浮かんでいた。

この球は一体…いや、何処かで見たことがあるようなないような…?」

「お前…いや、貴方は一体…」

—気になる事が幾つかあるようだが、順に説明しよう—

テレパシーはこの球が送ってきているらしい。自分も焦る気持ちを抑えながら話を聞くことにする。

「説明することとは…?」

—まず、この世界は君が居た宇宙ではないんだ—

「なんだって!」

ゼロがこことは別の宇宙へ行ったことは聞いてるし、自分もそういった所へ迷い込んでしまったのか?

—君の居た宇宙である男が恐るべき兵器を使用した。それこそ星どころか宇宙全体を崩壊させるようなものをね—

—それで、その余波に巻き込まれて君は元居た宇宙から弾かれ、この世界に流れ着いたんだ—

「そうだ…それで俺は…俺が元居た宇宙はどうなったんですか!? 光の国や宇宙警備隊は!?!」

—心配することにはなっていない。一言で言えば—

「一言で言えば…?」

—ウルトラマンキングがなんとかした—

「そ、そうですね…」

投げやりにも聞こえる答えだが、自分は納得してしまった。ウルトラマンキング。光の国に伝わる伝説の賢者の名前だ。恐らくこの球体が言うように本当に宇宙崩壊の危機を何とかしてしまったのだろう。

—次にこの世界のことだが—

「は、はい」

—ここは怪獣墓場学園。いわゆるウルトラマンと呼ばれる者達に負けた者達が送られてくる所だよ。ちなみに私はここの校長—

「が、学園?」

怪獣墓場というものは聞いたことがある。怪獣達の魂が流れ着くところだと。しかし其処に学園があるなんて聞いたことが無いぞ。

—だから本来此処にとって君のような存在は招かれざる客と言えるね—

「…」

その言葉に自分は黙ってしまった。確かに不可抗力とはいえ怪獣達の魂が眠る場所に土足で踏み入るような真似は確かに此処の者達にとつて迷惑だろう。

「じゃ、じゃあ、俺が元の宇宙に帰る方法はないのですか？」

— そうだね、それはいづれわかる—

「えっいづれって…」

— すまないが少なくとも今すぐに君を元の宇宙に返すことはできないんだ—

「そうなんですか………」

— だから君にはしばらくここで男子学生として生活してもらおう—

「えっ?」

な、なぜそうなるんだ?

— ここは学園だからね。君は留学生としてこの学園に来たことにしたから—

「そ、そんなこと急に言われても…」

— まあまあ、何かの勉強になるかもしれないよ? 見習いウルトラマン君—

「そんな…それに俺をウルトラマンだなんて、まだ正規の隊員にすらなっていないのに」

— それでは校長先生からは以上です—

「え、ちよつと待ってください! まだ聞きたいことが——」

球体は消えてしまった。いきなり留学生とか言われても…

なんか大変なことになってしまった。別の世界に来てしまった上に此処で学生をやつていかなければならないとは…

球体が消えてしまわなくて俺はしょうがないのでその辺を見ていくことにした。とりあえず俺が寝かされていたこの部屋の扉を開けると。

「ようこそロメオ君。私は君が来るのを待っていたのだ」

其処には特徴的な赤い帽子を被った少女がいた。

「き、君は…?」

「歓迎するぞ、何ならアンヌ隊員も呼んだらどうだい?」

「いや、なんの話ですか…? 本当にあなた誰ですか?」

いきなりわけのわからない話を振られ少し混乱する。だけどこの子の衣装何処かで見たような。

「自己紹介がまだだったね。私はメトロン星人。かつて君の大先輩であるウルトラセブンに敗れた者さ」

メ、メトロン星人!? 確かにこのコスチュームはっぽいけど…

「なんで、地球人のような姿になつてゐるんです?」

「おや、校長から聞いていなかったのかな? この学園の生徒は皆地球の女子高生の格好

をしているんだ」

な、なんだってー！！

おそらく今日一番の衝撃である。

「ど、どうしてそんなことになっているんですか!？」

「さあ、どうしてだろうねえ。ところでロメオ君」

「は、はい？」

「君は茶は好きかい？」

「え、まあ前に地球産の茶を飲んだことがあって悪くありませんでしたけど」

「そうかそうか、それでは後で特製の茶をご馳走しよう。」

「は、はあ……」

「後それから、校長から君に学園や泊まる所をちよつと案内するよう言われたから」

「あつそうなんですか？」

「うん。だから私の後を付いてくるといい」

他にあてもないし素直に彼女について行こう。



「ここが私の二番目に気に入ってる茶室だよー」

「すいません、これで茶室を紹介されるの三度目なんですけどどれだけ茶室あるんですかこの学校」

「じゃあ、今度は教室を紹介しようかな」

やっとか。他にもやけにもち米の多い給食室とかガッツ鳥なる変な生き物が飼育されてる小屋を紹介されたけどここ学校なんだし教室って普通始めの方で紹介されるものじゃないかな…

「あの、メトロンさん」

「うん？」

「ここの住人たちって皆『ウルトラマン』に敗れてここに来たんですよね？」

「うん。だいたいそうだよー」

「その、俺たちウルトラ族って恨まれてないんですか？まさか教室に入った途端袋叩きにあうとかないですよね…？」

「うふふ、まっさかー。そんなことにはならないよ」

「でも…」

「皆とつてもいい子だよ。素直になれない子もいるけどね」

「そうなんですか？」

「そーそー。あつこが教室だよ」

そう言いながらメトロン星人は目の前の扉を開ける。そこは過去に資料でみた地球の学校の教室に似ていて、今は授業の時間ではないのか数人の少女が思い思いの時間に浸っているようだった。

その内の一人である三日月型の角が生えて尻尾の先端にプラグのついた少女がこちらに気づいたようで声をかけてきた。

「あれ？メトロンちゃんその人だあれ？新入りさんなの？」

「そうだよ。留学生のロメオ君だ。仲良くしてやってね」

「そうなんだー！私はエレキング。よろしくね！」

彼女は怪獣エレキングらしい。流石に衝撃にも慣れたので普通に挨拶を返す。

「エレキングさん、よろしくお願ひします」

その時、

「仲良くだと？メトロン星人お前正気か？そいつはウルトラ族だぞ」

と教室の奥の方にいた黒い衣装の少女がこつちを睨みながら発言した。

「えーそうなの？メフィラスちゃん」

どうやら彼女はメフィラス星人のようだ。教室にいた他の少女も驚いている。

「ひえええええ！！ウルトラ水流は！ウルトラ水流だけは！勘弁してええええ！！」

「お、おい。落ち着けジャミラー!」

若干1名かなり取り乱している子もいる。

「メフィラスちゃん。彼は校長が正式に受け入れた留学生だよ?」

「だからどうした。私は怪獣同士仲良くするのはまあいいが、よりにもよってウルトラ族とは仲良くできない」

話が違う。やっぱりウルトラ族を恨んでる者がいるではないか。

「その、メフィラスさん。俺は別に貴女と敵対する気はないんですけど」

「メフィラスちゃん。私知ってる!そういうのってツンデレっていうんでしょ?」

「違うわ!」

「エレキングさんツンデレの意味間違えてると思います」

エレキングの間の抜けた発言で張りつめていた空気は一気にゆるくなった。

「と、とにかく私は付き合ってられないからな!」

「メフィラスちゃん待つてよく。あっじやあまた明日ね〜」

メフィラス星人とエレキングは教室から出て行ってしまった。

「行ってしまいましたね…」

「うーん。メフィラスちゃんはまだこの学園に来たばかりなんだ。あまり気にしないで」

「はあ…」

「そうだけ。オレとかは気にしてないしメフィラスみたいのが珍しいんだ」

と、教室にいた少女の一人が話しかけて来た。

「君は？」

「オレはレッドキング。ちなみ今隅っこで小さくなってるのはジャミラだ」

「水は…水はダメ…」

両方とも聞いたことのある怪獣だ。レッドキングは地球に何度も出現した怪獣でジャミラは元地球人で水に弱い怪獣だったか。

「本当に俺たちウルトラ族は恨まれてないんですか？その、ジャミラさん怯えていますし」「あー、まあ程度の差はあるけど。そういうことを気にしてない奴が殆どだよ。ジャミラもトラウマにはなってるけどウルトラ族とか恨んでるわけじゃないし」

「そうなんですか…」

うーむ本当なのだろうか。なんか不安が大きい…

「そろそろいいかな？」

「あつメトロンさん」

「次はロメオ君が泊まるところに案内するからね」

「分かりました。じゃあレッドキング達。これからお世話になりますね」

「おう、よろしく」

「水…水…」



メトロン星人に案内された場所は地球の木造アパートのような建物だった。

「ここが、君の泊まる所だよ。ちなみに近くには女子寮があるから」

「随分古風な様式の建物ですね」

「私の趣味だからね。部屋はどれも空いてるから自由に使っていいよ」

「分かりました」

「それじゃあ私はこれで。明日学園で会おう！」

とメトロン星人は何処かへ走っていった。

俺はとりあえずアパートの部屋の1つに入った。中は和室になっており、ちゃぶ台や布団が置かれていた。

なんか大変な1日だったな…別の世界に飛ばされたり、そこは怪獣が少女になってる場所だったり、険悪な雰囲気になったり怯えられたり。

校長を名乗る存在は勉強になるとも言っていたが、正直早く元の宇宙に戻って正式な

隊員になるための訓練に戻りたいものだ。

ぐううと自分の腹の音が鳴った。地球人の身体になったことで何か食物が必要になったらしい。

俺はこのアパートに食糧はないか探すことにしたのだった。

2話 学生生活二日目又はウルたまロメオ

「はあ……お腹空いたな……」

あの後アパート中を探してみたのだが、結局ロクな食い物が見つからなかった。あつたのはお茶くらいである。そのまま空腹のまま眠れない夜を過ごした。

うーむ、訓練の一環でエネルギーがもとにも補給できない環境で過ごすなんてこともやったけど、その時とはまた別の辛さだ。光の国に居た時は基本的に光エネルギーを吸収してれば良かったのだけれどもヒューマノイドの姿で長時間過ごすのは初めてなのだ。

「学校に行けば給食にありつけるかな……」

ウルトラ族だろうとなんだだろうと空腹のままはいけない。かつてウルトラ兄弟の1人ジャックが残した言葉「腹ペコのまま学校へ行かぬこと」に反するが今現在食事に取りつける当では学校しかない。

ということまで空腹で弱った身体を押しして怪獣墓場学園へ向かうことにした。



「ロメオ君おはよろしく！」

「げ…昨日のウルトラ族か…」

学園へ行く途中、エレキングとメフィラス星人に出会った。エレキングは笑顔で挨拶してきたがメフィラス星人は嫌そうだった。なんかああ露骨に態度にだされると、ちよつと心外だな…

いやウルトラ族の活動を考えるとむしろメフィラス星人の返しが正常なのかもしれないけど。沢山感謝もされるけど、沢山恨みも買うのが宇宙警備隊だからな。

「おはようございませす…」

そんなことを考えながらこつちも挨拶を返した。

「ん？なんかロメオ君昨日より元気ないね」

「実は昨日の夜から何も食べてなくて…」

「はっウルトラ族が空腹で力がでないとはとんだお笑い草だな。ウルトラマンがいたら奴も笑うだろう」

む…馬鹿にされたが…空腹なのは事実、今の状態だとチブル星人と殴り合いになつても負けるだろう。

「すいません…なにか食事の当てはあるでしょうか…正直今のままでは給食までもつかどうか…」

「えー？誰か炎を吐ける子にお願いしてガッツ鳥を丸焼きにしてもらうとか？」

「なっ、エレキングお前なんて残酷なことを考えるのだ…！」

ガッツ鳥つて昨日見かけたガッツ星人にそっくりな鳥か。あれつて食べるんだ…

「腹に入るならなんでもいいかな…」

「じゃあ誰か呼んで来るね〜」

「待て待て！私がその菓子屋のスイーツを奢る！だからガッツ鳥を焼くのは無しだ！」

ということまでメフィラス星人にスイーツを奢られることになった。

「ありがとうございますメフィラスさん。ご馳走さまでした」

「フンツ！別にお前を助けたわけじゃないからな！後、今度金返せよ」

「メフィラスちゃんごちそうさま〜」



学園に登校した俺は教室に入ったのだが、早々に怪獣達から質問攻めにあつた。

「光の国ってどんな所？」

とか

「地球に行つたことある？」

とか

「バラバラになつても再生できる？」

とか

「腐腐腐…彼氏はいる？」

とかなんか後半変な質問だったけど気にしないでおこう。

そんなこんなで授業が始まるのを待つていたが。

「授業をはじめるだよ」

と青いハサミ状の手をした小柄な少女が教壇に立つた。

自分は小声で近くにいたレッドキングに『あの子がこの学園の先生？』と聞いた。

「いや、テンペラーは同じ生徒なんだけど勝手に先生面していつも何かおっぱじめるんだよ」

レッドキングによると少女、テンペラー星人は先生では無いらしい。じゃあ、先生はどこにいるんだろうか？

なんて考えているとテンペラー星人が話し始めた。

「あんた達は怪獣としての本分を忘れているだわよ！」

「怪獣は暴れるのが仕事！宇宙人は侵略するのが仕事！そしてウルトラ兄弟を倒す！」

「なのになんなんだわよ！よりによってウルトラ族の存在を許すとわ！」

ビシツとテンペラー星人の手がこちらへ差される。

「えっ俺？」

「お前以外誰がいるだわよ！」

テンペラー星人はこちらを睨んでくる。星人の姿ならまだしも少女の姿だからそこまで威圧感を感じないが。

「あの…話が見えないんですが…」

「お前が気に入らないんだわよ！」

ええ…：またか、やつぱり恨み買ってるんじゃないですか。

「ちよつと待っててください！確かにウルトラ族とテンペラー星人は敵対関係にありますけど、ここは中立地帯みたいなものでしょ!?自分達が積極的に争う事はないですよ！」

「ふんっそんなこと知ったこつちやないだわよ。ウルトラ兄弟ほどじゃないけどウルトラ族は不？戴天の仇！生かしちやおけないだわよ！」

テンペラー星人は腕をこちらに構える。自分も自然とファイティングポーズをとっていた。くっ…やるしかないのか？相手はテンペラー星人。まだ正式な隊員にさえ

なっていない自分が勝てる相手なのか？

テンペラーと睨みあう。そして何秒か経過した。

「くら「はい。ストップ」なんだわよ!？」

「メトロンさん!？」

自分達の間メトロン星人が割り込んできた。

「二人ともこんな所で喧嘩はご法度だよ」

「むっ止めるなメトロン! ウルトラ族は仇なのだわよ!」

「そうはいかないんだよ」

「メトロンさん。俺も戦いたくないんですが、相手が来るとなると…」

「まあまあ落ち着いて」

メトロン星人は笑顔を絶やさず俺達を制止する動作をする。そしてテンペラー星人の方を向く。

「テンペラーちゃん。貴女が倒したいのはウルトラ族というよりウルトラ兄弟でしょ?」

「確かにそうだよ。でもそいつは…」

「確かにロメオ君もウルトラ族だよ。でも彼はね、まだ正式な宇宙警備隊員じゃないんだ」

「えっ?なぜそれを!？」

「校長から聞いてるからね。まさかテンペラーちゃんウルトラ兄弟どころか一人前のウルトラ戦士ですらない子を倒して勝ち誇るつもり?」

「そっそれは…」

テンペラー星人がたじろぐ。心なしかさつきまで感じていた殺気も弱まっている気がする。

「それに流血沙汰は校長が許さないよ?ましてやゲストさんが大怪我するような事態を見逃すと思う?」

メトロン星人は笑顔のままだが、なんとなくテンペラー星人とは別種の圧を感じる…

「うっ、校長が…」

テンペラー星人の顔が青ざめる。どうやらあの校長には逆らえないらしい。

「だからね、好き嫌いはあっても二人とも喧嘩はしないでほしいな」

メトロン星人はそう話をしめる。

テンペラー星人は暫く身じろいだ後、

「ふ、ふん!ロメオとかいうやつ、今回はこれで勘弁してあげるだよ!」

と言つて教室を出ていった。

一部始終を見ていたギャラリーはざわざわと騒ぐ。

「へー、ロメオ君ってウルトラマンの卵だったんだ。略して『ウルたま』だね！」

「お前それ別の作品のネタだろ…しかし、ウルトラ族にして通りで覇気がないと思った」
エレキングがのんきに言いそれにメフィラス星人がツツコミをいれる。

俺はメトロン星人にお礼を言うことにした。

「すみませんメトロンさん…助かりました」

「うんうん。気にしないで。それにああ言ってたけどテンペラーちゃんも根は悪い子じゃないから」

「肩書は極悪宇宙人だけだな…」

メトロン星人の言葉にメフィラス星人がぼそりと呟く。

結局ざわざわとした空気は放課後まで続いた。



——放課後

夕暮れに染まった校舎を背に俺は校庭を歩いていく。

「はあ…割と大変な一日だった…」

空腹に苦しめられるわ、好奇の視線に晒されるわ、仕舞には一触即発の事態だもんな。

トラブル続きである。

何より悔しいのが今回見逃されたことの原因の半分が、自分が半人前ということだ。自分もそれなりに鍛えて、光の国で同期のゼットらと切磋琢磨して来たというのに、まだまだ鍛錬は足りないらしい。

「全く。学園生活なんて送っている場合じゃないんじゃないか？」

そんなふうに黄昏ていると、ワンワンと犬の鳴き声が聞こえて来た。

何だと視線を鳴き声のする方に向けると、

「た、食べないでくださいーいー」

少女が怪獣グドンに似た犬に襲われていた。

俺は思わずそちらにいった。

「やめろーこの子から離れろー」

グドン犬をおい払うべく身体のエレルギーを循環させ、腕力を強化するそして、グドン犬少女から引き離れた。

すると、4〜5匹いたグドン犬は何処かへ行ってしまった。

俺は倒れた少女に駆け寄った。

「怪我はない？」と抱き起こしたツインテールの少女は「あ…ありがとうございます」とお礼をいった。

「俺はロメオ、留学生です。君の名前は？」

「ツインテールです……」

ツインテール。グドンと食物連鎖の関係にある怪獣か。名は体を表すと言うが髪がツインテールだ。

「ロメオさん……知ってますウルトラ戦士の方ですよ。どうして私を助けたんですか？
私は怪獣なのに……」

「君が困っていたじゃダメかな」

「でも私、グドンから逃れるために大きな被害を出しました。そうなのに……」

「外ならともかくこの怪獣墓場は色々事情が違うらしい。」

「それに困っている相手が怪獣や宇宙人でも手を差し伸べるのもウルトラマンじゃないかと思って」

「……うう」

「どうして泣くんですか？まさか傷が!？」

「いえ、産まれてからこんなに優しくされたのは初めてで……」

「そうですか……俺もここに來てから人助けをしたのは貴女が初めてです」

「じゃあ私は第1号なんですね。ふふふ……」

ツインテールが笑う。

「じゃあ俺はこれで。また、貴女が襲われることになったら助けますから」
「ウルたまがですか…」

「いつか誰もウルたまなんて呼ばせないくらいの者になりますよ」



ツインテールと別れた俺は寢床であるアパートに戻った。

アパートの前には一週間分の食糧が校長からの詫び状と共に置いてあった。

食糧をアパートの中に運びこみながら俺はこの怪獣墓場で鍛錬を怠らないことと、困っている人はできる範囲で助けることを胸に誓うのだった。

3話 遠足に行くようだ

こんにちは、ロメオです。

あれから鍛錬するということで、学園から使つてない器具を借りることができた。

これでもこまで有効か分からないが、鍛錬をすることが出来る。学園側には感謝だ。

「…よしこれで3セット完了っつと」

朝。学園の体育館で俺は朝のトレーニングを終えていた。

その時体育館の扉が開いてツインテールが入ってきた。

「おはようロメオさん。今日も早いですね、スポーツドリンク持って来たけど飲みますか？」

「あつおはようございますツインテールさん。ありがとうございます！」

あの後ツインテールとはよく話すようになり、時たまトレーニングの時にも顔を出して差し入れをしてくれるようになった。

学園でも一緒にいることが多い、曰くなにかあつたらまた守ってくれますよね？とのことだ。信頼されているようで嬉しいけど半人前の身だけに期待が重い…

まあ兎に角朝の鍛錬も終わったし、教室に向かおうか。



ここに来て数週間。大分この住人と打ち解けてきた気がする。

初日の様な質問攻めは無くなったし、メトロン星人が言ってた通り皆気のいい人だ。ありがたいことにメフィラス星人やテンペラー星人、ヤプールの様な例を除けば皆仲良くしてくれる。最初は戸惑いもあったが、自分も徐々に此処に慣れていつているようだ。

いつものように教室で授業を待っていると、教室が騒がしくなってきた。

「これより我が部のデモンストレーションを行うだよ。我々の実力をとくと見るとい
いだわよ!!」

見るとメフィラス星人とテンペラー星人がウルトラ戦士を模した風船人形を置き、な
にかをするようだ。

「まずは、ビームウィップ!」

テンペラー星人が腕から鞭状のビームを放ち、風船人形を攻撃する。

おとおと歓声がギャラリィから出る。

「そして特殊スペクトル光線!!」

こんどはこちらに向けて光線を放ってきた！

「わーっあぶない！」

「こっちにむけるな！」

自分も光線を回避する。

「フフフ、大丈夫だよ……これはウルトラ兄弟にしか反応しない光線だよ」

とテンペラー星人が言うが、自分が当たっていたらどうなっていたのだろうか？

そして

「メフィラスグリッブビーム!!」

と今度はメフィラス星人が風船人形を攻撃した。

「フツよそう……」

そしてメフィラス星人は構えていた腕を下げる。

「でたっ」

「いつものやつ！」

教室が拍手につつまれる。どうやらデモンストレーションとやらは終わったようだ。

メフィラス星人とテンペラー星人は今度は受付と書かれた貼り紙のついた机に座ったが教室の怪獣たちは

「面白かったー」

「いいコントだったねー」

と出ていった。

結果が思っていたものと違ったのかメフィラス星人とテンペラー星人は少しの間言い争いをしていたが

「ここに残ったメンバーだけでも入部させておくか…」

とメフィラス星人が言った。

因みに今教室にいるのはデモンストレーション?を行った二人と俺、エレキング、レッドキング、ツインテールだ。

「入部?何の話ですか?」

「今我々はウルトラ兄弟分析部というものを立ち上げてな…認められるには5人の部員が必要なのだ。」

「お前らにも入ってもらえば定員が埋まるだわよ」

ウルトラ兄弟分析部…その名の通りと考えれば、ウルトラ兄弟のことを分析するクラブ活動ということか…?ウルトラ族の自分がそんなものに入っては利敵行為にならないだろうか?

「俺が入るんですか?自分一応ウルトラ族なんですけど」

「敵を知り己を知ればという言葉があるだろう?ウルトラ兄弟のことを分析すればお前

のプラスにもなるんじゃないか？」

「自分にとつてウルトラ兄弟は味方なんですけど…」

でも、もしウルトラ兄弟のことが分かればその強さの秘密などを自分にも活かせるかもしれない。

それにもしメフィラス星人達がなにかを企もうとしたら近い位置にいればそれを止めることができるんじゃないのか？

「分かりました入部します」

これも鍛錬に繋がると思つて俺はウルトラ兄弟分析部に入る事にした。

ちなみに他の3人も入部することになった。ツインテールは

「必要なのは5人だから別に入らなくてもいいだよ。てかお前誰だよ？」

「ツインテールです！」

と少しいざこざがあつたが。



それからしばらくして――

あの後テンペラー星人とメフィラス星人がゼットンにボコられたりといった事件が

あつたが、今度は遠足に行くことになった。

行先はあの地球である。行先は多数決で怪獣達の話だと怪獣ランドなる場所が有力そうだったが、地球への票がなぜか一万票もあつて地球に決定したようだ。

地球か：かのウルトラ兄弟にとつては馴染み深い惑星。宇宙警備隊でもエリートが防衛の任に就けるとまで言われる所、数多の怪獣が跋扈し、侵略者に狙われた魔境とも言われる星。

俺はあの事件の時に近くまで行つたことはあるけど、実際に着陸とかはしてないからな。

前から興味はあつたし、いいんじゃないか地球。

そして、ウルトラ兄弟分析部室で話し合いが行われた。遠足のしおりには禁止事項に侵略禁止、移住禁止、破壊禁止と書かれていて、それについて学校にバレないように活動するようだ。

ちよつと待って、普通に侵略の意思があるじゃないか。やっぱりなにか企んでたな：でも、校長と仲のよいようなメトロン星人がなにも言つてないあたり、学校側としてはまだセーフなのかもしれない。

でも用心の為に見張つておいたほうがいいだろうな：

会議の結果人の心を奪うということで我々は秋葉原という町に向かうことになった。

その時雨が降ってきた。

「雨〜…」

「そうかジャミラさんは水が苦手だったね」

「でも地球にも雨はあるぞ」

「わ、私〜地球に行くためなら〜雨を克服しようと思う〜！」

「おお！応援してるぜ」

「でも雨を克服するって…」

「わああああああああああ!!」

とジャミラは雨の中傘を差さずに走り去っていった。

レッドキングは

「よしっ。頑張れよー！」

と言っていたが、風邪をひかなければいいのだけど…

そう思っていたが翌日ジャミラが酷い怪獣風邪をひいて乗船不可になった報が届いた。

だから言ったのに…



遠足に行くことになった俺達は宇宙船に乗って怪獣墓場を飛び立った。

宇宙船のなかで俺たちは大怪獣ラッシュなるゲームをやったりして時間を潰していた

た
ツイントールが話しかけてくる。

「ロメオさんは地球に行くのは初めてですか？」

「そうだね。ウルトラ兄弟を魅了した惑星がどんな所なのか気になるよ。そういえばツイントールさんは地球出身でしたよね？」

「そうですね。正直言つて余り良い思い出はないです…産まれて直ぐにグドンに狙われたり、目を潰されたりとかしましたし…」

「そうですね…嫌な事を思い出させてすみません…」

「いえ、今回は皆がいますし大丈夫です」

そんなことを話していると

「うう…」

レッドキングがどうやら宇宙船酔いしたみたいだ

「大丈夫ですか？今エチケツト袋を…」

「酔った人は一番前の席に寝かせるだよ」

その時メトロン星人が

「レッドキングが吐くつてまさか、水爆じゃないよね」

「!? 面白いえばウルトラマンが戦った二代目のレッドキングは水爆を飲み込んでいたって話を聞いたような…」

皆も焦り始める

「おいつお前水爆を飲み込んでいるのか!？」

「えっと…確か昔、うつ出そう」

「なんとかこらえて〜」

「これ、吐き出させたらエライことになりますよね…」

「もどすなら地球でもどすだわよ!」

「やめろ! 地球が壊れる!」

結局レッドキングの口にテープを貼り付けて吐き気が収まるまで待つしかないという事になった。

そんなこんなで

「みんな! 見るだわよ!」

地球が見えてきた。あの事件の時は余裕がなくて気付かなかったけど、こうして近くで見ると美しい星である。

そして我々怪獣墓場学園一行は地球に向かうことになるのだが、この時俺は数奇な運命に巻き込まれることになるとは露とも思っていなかった。

4話 初めての地球

かくして我々怪獣墓場学園一行は地球に到着した。着陸場所は日本の富士五湖の畔らしい。

「ここが地球か…見せてもらおうかウルトラ兄弟を魅了した星というのを！」

「ここ!!私が育った湖だよーっ！」

「マジか!？」

「そうなんですかエレキングさん？」

湖の方を見ていると同じく湖を見ていたエレキングが声をあげた。

確か地球で初めて出現したエレキングは吾妻湖という場所で育ったそうだがここがそうなのだろうか？

エレキングは嬉しそうに「わー!!!懐かしいよーっ」と湖に飛び込む。

「あ〜！何やってんだ!!」

メフィラス星人が言うがここはエレキングにとって言わば故郷の様なもの、少しばかりはしゃいでも——

次の瞬間ザパツという音と共に、エレキングが数十メートルクラスに巨大化してい

た。

「!?その姿のまま巨大化できるのかい!こんな所見つかつたら大騒ぎになるぞつ。」

「コラ~~~~!!」

「何巨大化してるだわよ!」

「戻れ戻れーっ」

皆も流石にまずいと思っっているのか大慌てだ。

その後直ぐにエレキングは縮小してくれたが、人気のない湖だったから良かったものの危うく通報される所だった。そんなことになったら遠足もおじやんである。

さて、今回の遠足は基本的に人の目を避けている形とはいえ怪獣達の姿は目立つ。その対策として地球では制服を着ることになっていらい。この制服、怪獣達の特徴をカモフラージュする効果があるようで、これである程度は地球に馴染めるようだ。因みに俺の分は用意が間に合わなかったらしく、普通の服で我慢してくれとのことだった。少し残念だ。

こうして、地球人の格好になった俺達は秋葉原へ向かった。

「着いただわよ!」

特に途中でトラブルもなく秋葉原に到着した。そしてメトロン星人の案内によつて

『アイドル』というものに会いに行く途中

「…その、なんか見られてますね」

「隠密でできなかったねー」

多くの視線を感じる…というか普通に目立っている…おかしいな、カモフラージュはしている筈なんだけど。

メトロン星人によると俺たちはモテているらしい。更にエレキングによると地球人は可愛い子に弱いんだとか。つまり、単純に俺達の容姿が目を引くものだけということか？

なんとか人々を撒いて俺達は地球のアイドルが見れる会場という所にやってきた。アイドルの名前は『ULTRA78』というらしい。既に辺りには行列ができており、かなりの人気があることが窺わせる。

「しかしどんなものなんでしょうねアイドルって」

「私も見るのは初めてだが、地球人の心を動かす力を持っているのだろうな」
「私は何回か見たことあるけど凄いものだよ。まあ百聞は一見に如かずだね」

メトロン星人の言う通りなのだろう。俺達は行列に沿って会場の奥へと進んで行った。



会場に入っただけでしばらくすると、ステージに5人の少女たちが上がり、歌を歌い始めた。観客もどんどん熱狂していく。なるほど、確かによく分からないが地球人の心を動かしているようだ。そのうち一曲目が歌い終わったらしく、辺りに鳴っていた音楽も止んだ。

すると、メフィラス星人たちがアイドルにステージの前に来るよう呼ばれたのだ。どうやら女性のファンと思われたらしい。

メフィラス星人は何処から来たのか、もしかしてアイドルなのかとか聞かれた。メフィラス星人はどう答えるのかと思っていると、

「…我々は、とある学園から来た新星アイドル…名を…：…ダークネスブラック!!」

!?!なにそれ、聞いてないんだけど!

「我々は地球人の心に挑戦する。そして勝つ!」

おおくつと会場がどよめきに包まれる。

「よし、今日のところはこれくらいでいいだろう」

「爪痕残しただわよ」

「まだ盛り上がってるねー」

「あの、メフィラスさん…流石にこれは目立ち過ぎでは？」

「私、もしかして凄い目立ってます？」

そんなこんなでライブ会場からでた自分たちは遠足の残り時間を気にしながら土産を買うことになった。

そして土産を買うためによったある店で、

「わー、ここすごい。フィギュアが沢山あるー」

ここは人形を売っている店らしく、なんとウルトラ兄弟達ウルトラ戦士のフィギュアや怪獣のフィギュアがあった。

おお、こんなものがあるのか。せっかくだしゾフィーからヒカリまでのウルトラ兄弟のフィギュアを買ってしまおう。

ちなみにエレキングは自分用にレッドキングのフィギュア、ジャミラへの土産に『ジャミラのみずあそび』なる玩具を買っていた。テンペラー星人にこれ渡すとアイツのメンタル崩壊するだわよと言われていたが同感である。

さて、遠足の残り時間も少なくなり、俺達は急いで湖畔に戻った。しかしそこで思わぬトラブルが発生した。乗船に手間取ったエレキングを庇ってレッドキングが地球に残ってしまったのだ。

「どうしよう…これは学園側に伝えて迎えに行かせたほうがいいんじゃない？」

「待て！そんなことをしたら学園側に今回秘密裏に秋葉原まで言ったことがバレるかもしれない！」

「でもレッドキングちゃん…心配だな。早く迎えに行ったほうがいいよ」

「はい、もしかしたら…の話ですが怪獣だとバレたら退治されてしまうかもしれません…」

レッドキング…地球に現れた怪獣はそのほとんどが退治されたく。彼女も例外ではない可能性が高い。怪獣とウルトラ戦士は敵対する仲ではあるが、怪獣墓場では彼女には良くしてもらったし、そんな後味の悪いことにはさせたくない。なんとかしてまた地球へ行かないと…



怪獣墓場に戻ってきたが、既に地球に残った怪獣がいることは学園側に知られていたらしく、校長先生はかんかんに怒っていた。そして誰がいなくなったのか確認するため点呼を取った。このままではレッドキングの不在がバレる！そう思った時

『どうした、いないのかレッドキング』

「はい」

なんとエレキングがレッドキングのフィギュアを掲げて返事した。

いやいやいや流石にそれはダメだろ！これはまずい…！そう思ってたら

『随分縮んだようだが』

「宇宙船酔いです」

『……そうか…』

いけるんかい！それでいいのか怪獣墓場…

そのままつつがなく点呼は終了した。まさかあんな方法で躲せるとは思ってたが、
たが取り敢えずなんとかなった…

その後新にダークネスブラックのメンバーにアントラーを加えたのだが、

朝

「ふう…今日の朝の分はこれで終わりと、」

今日も今日とてトレーニングをしていたのだが、いきなり後ろから抱き着かれた。

「お・に・い・さ・ま」

「君はアントラー!?!なぜ抱き着いてくるんですか!?!」

このアントラーが懐いていたのは確かテンペラー星人の筈だったのだが…

「ん?ん?え?…あれ?忘れちゃった」

「ええ…」

「どうやら頭の弱い子のようである。」

「おにいさま〜」

「その、女の子がこう異性にべたべたするのは良くないと思うんですが…」

「こんな所を誰かに見られたら誤解されてしまう…」

「抱き着くアントラーを外しにかかるが予想以上に力が強く中々外せなかった。」

「ロメオさん、いつもの差し入れ——」

「あつツインテールさん！」

「おにいさまっ」

ツインテールの持っていたスポーツドリンクのボトルが床に落ちる。

そしてツインテールは体育館のドアを閉めた。

「ああつ！ちよつ誤解です！誤解ですから!!」

その後、ツインテールの誤解を解くのに滅茶苦茶苦労した。

ちなみにアントラーは、テンペラー星人を見つけるとそっちに抱き着きに行つた。

5話 再び地球へ

あれからダークネスブラックに新しいメンバーが加わった。名はゴドラ星人、変身能力をもった宇宙人である。このゴドラ星人、ダークネスブラックに入った理由はダンに会いたいからだという。ダン、つまりはウルトラセブンに会いたいとのことだが自分は雪辱を晴らしにでもいくのかと思っていたがどうも違うらしい。

なんとゴドラ星人はセブンに思慕を抱いておりだから会いに行きたいのだとか。うーん、ウルトラ戦士に恨みを持つ所か憧れるとは、本当にメフィラス星人やテンペラー星人のような例はここでは珍しいらしい。あのヤプールもエースが好きらしいという噂を聞いたときは本当に驚いた、こつちの世界ではエース所かウルトラ戦士の宿敵の一つなのに…

ていうかセブンは息子さんいるんですけど…それは知っているんだらうか。

そんなこんなで、我々ダークネスブラックは秘密裏に地球に行くことになった。

主にアイドル活動をするらしいが自分はいつの間にかマネージャーという立場になっていった。リーダー格の二人曰く。

「お前は男だしまあマネージャーでいいだろう。他のメンバーに混ぜるのも単独で活動させるのも面倒そうだしな」

「せいぜいこき使うから覚悟するだわよ」

とのこと。うーむ、女の子の集団の中で仲間外れにされないだけマシか？取り敢えずメフィラス星人とテンペラー星人を見張るのに不都合はなさそうだが…

さて、俺達が不在の間はモチロンがなんとか誤魔化すらしい。どうやって誤魔化すのかは分からないけど、点呼の件を見るに、まあなんとかなりそうだな。

ちなみに、ダークネスブラックの一員として一緒に行くはずだったジャミラは途中のアクシデントで怪我を負い、お留守番ということになった。なんて間の悪い…

後日お見舞いにはいったが、「いいなー！いいなー！」と羨ましがられた。

「自分は別に物見遊山とかじゃなくて一応レッドキングさんの迎えも兼ねていくんですけど」

「でも、地球の土を踏めるんですよね？私だけまた行けないなんて…」

「また機会は巡ってくると思うし、そこまで悲観的にならなくても…」

「ロメオさんは故郷が恋しくないんですか？」

「そりゃあ、恋しく無いと言ったら嘘ですけど…」

「だったら私の気持ち、分かりますよね〜？あいてて…」

「大丈夫ですか!？」

「どうやら興奮して身体に障ったようだ。」

「しかし故郷か…光の国からこつちに来て結構経つけど、割とここ居心地いいんだよな」

…

でも、本当に永い時間を経たならジャミラの気持ちも分かるようになるんだろうか？
取り敢えずジャミラを介抱して別れた。

◇ ◇ ◇

さて、今日の出発の日である。メトロン星人の宇宙船にダークネスブラックのメンバーであるメフィラス星人、テンペラー星人、エレキング、メトロン星人、アントラー、ゴドラ星人、ツインテールにマネージャーの俺が乗り込み、怪獣墓場を飛び立った。

道中シーボーズを見かけたり、作戦会議をしながら地球のすぐ側まで来たのだが——
なんと大気圏突入の際に宇宙船に負荷のかかり過ぎで真ん中から折れる危険があったのだ。

「このまま宇宙船があわやスクラップになりかけた時、俺は」

「メトロンさん！外に出ることは出来ますか!？」

「え!? そっちのハッチから出れるけど、まさか!？」

「なんとかやってみます!」

俺は体に力を込めた、こっちに來てからやったことはないけどヒューマノイド態からの戻り方は——こうだ!

——SIDEメフィラス星人——

くそつメトロンめ! なにが木造の弾力だ、木造と聞いて不安になったが案の定ではないか。

この船の電気供給役をやっているエレキングのいる左ウイングに移る。その時だ、宇宙船が大きく揺れた。まさか、とうとう船体が折れたか!?! ……いや、それにしても起きない。どうなっている? 宇宙船の窓から外を見てみると——

そこには銀と「緑」の体色をした巨人が宇宙船を抱えていた。



——SIDEロメオ——

ふう…なんとかなった。ウルトラ族の姿で宇宙船を保護したまま日本への不時着を

成功させた。しかし、話には聞いていたけど地球で巨大な姿を維持したまま活動するのってかなり体力を使うんだな。

現在俺達は森の中を町に向かって進んでいる。ちなみ俺は力のあるアントラーに肩を貸されている。だってさっきの変身でフラフラなんだもん。歩いている途中メフィラス星人達が

「それにしても緑だったな…」

「緑ってなにー?」

「ああ、エレキングちゃんは見えないのか。さっきのロメオ君の姿のことだよ」

「緑だったかわよ」

「緑だったねー」

「緑でしたわ」

「緑でしたね」

「その、そんなに緑が珍しいんですか?」

言われるほどかなあ…確かにここ最近俺のようなグリーン族は姿を減らしていて、宇宙警備隊訓練生の同期にも他に居なかつたけど。

「いや、普通ウルトラ族は銀と赤だろ? 少なくともM78星雲外では見かけたことないぞ」

「いやシルバー族とレッド族のことを言ってるんだと思いますけど、他にもブルー族やホワイト族とかいるんですよ」

「うむむ…ウルトラ族に緑色の奴がいるとか知らなかっただよ…調査のし直しだわね……」

「それにしてもロメオよ」

「はい？なんですかメフィラスさん」

「癩だが、借りを作ってしまったな。まさかウルトラ族に助けられるとは…その、ありがとう」

メフィラス星人が照れくさそうに言う。

「ええ、気にしないでいいですよ。人助けはウルトラ族の性みたいなものですし、皆さん怪我も無くて良かったですよ」

さて、そういえば帰る時どうしよう。乗ってきた宇宙船は大破こそしなかったものの修理できる場所もなさそうだし、これまた無茶苦茶疲れそうだけど俺が皆を引っ張っていくとか？

うーん、取り敢えずこの話はその時になってから考えようか…



森を抜け、町に着いた頃には日が暮れていた。

取り敢えず我々は宿を探し、ネカフェなる場所で一夜を明かすこととなった。

案内された部屋ではソファやテーブル、本棚、小型コンピュータと言ったものがあつた。

「おお」

「わあー」

皆こういう所に来るのは初めてなのか、中に入るなり感嘆の声を上げる。

まあ、俺も初めてなんだけどね！　しかし、そんな声を上げている暇など無い。

なぜなら、俺は今から一人でシャワーを浴びなければならぬからだ。

なんかドキドキするな：相手は女子の姿とはいえず中身は怪獣なのに。いや、そもそもウルトラ族つてそっち方面の欲は薄めなんだけどこっちに來てから、なのか？　やけに三大欲求が強まっているような。別に別種族と融合した訳でもないんだけどな。

そんなことを考えながら個室のシャワールームで服を脱ぎ、森で着いた汚れを落とす。

んゝ気持ちいいなあゝ疲れた身体に効くなくとやつてると個室の方が騒がしい。

なんだ？　と思ひ、身体を拭きシャワールームから出ると皆がコンピュータの液晶を

覗き込んでいます。

「どうしたんですか？」

と尋ねるとツインテールが

「あつロメオさん。パソコンでこの付近のことを調べたら…」

なんでもこの付近にあのモロボシ・ダンの店があるのだという。

それで皆（てかゴドラ星人が）興奮していたらしい。

ええ…いやウルトラ族がこんな所で堂々と店を出している可能性は低いと思う…

「本当なんですか…？」

「それを明日偵察に行く予定だ」

とメフィラス星人

「上手くいけばウルトラ兄弟を一人抹殺できるだよ。フフフ…」

テンペラー星人は何か企んでいるって顔をしている。

「よし、今日はもう寝るぞ」

「そうですね、俺も…」

変身時の疲労が残り俺もかなり眠気がする…部屋の隅で寝させてもらおう…。



「ロメオさん。…もう眠ってしまったみたいですね」

「ふふ…今日でロメオさんに助けてもらったのはグドン犬の時と合わせて二度目になりますかね…」

「ロメオさん。こうしていつまで側に居れるかは分かりませんが、私ロメオさんのこと…」



朝になった。騒がしきで目を覚ます。

「あつロメオ君おはようっ」

元気な挨拶をするのはエレキングだ。その横で

「お前らなんだその格好は…」

メフィラス星人が呟くので視線の先を見ると

「なについて見たまんまだよ」

「ああ…ダン待っていてくださしまし…」

メトロン星人とゴドラ星人が何故か看護師の衣装を着ていた。

「えっなんですかそれ？」

「ナース服だよ。モロボシ・ダンがメロメロになると思ってたね、即配してもらったんだ」
「貴重な路費をそんなことに使うなだよ……」

そんなことがあり、自分達はまず「モロボシ・ダン」の店に行つてからレッドキングと合流することにした。

ネカフエを出て暫く歩き、俺達はジヨリーシャポーという店に到着した。店の看板にはデフォルメされたウルトラセブンのイラストが描いてあったが、まさかな……

店内に入った俺たちはハヤシライスを注文し、辺りを見回した。

「あっ！」

とメトロン星人が棚を指さした。

「どうした？メトロン」

「ここにメトロン星人とエレキングの人形が！」

「わぁーホントだぁ」

「わたくしのはないんですの？」

確かにメトロン星人とエレキングの人形が置いてある。その奥にはウルトラセブンの人形も……いや人形くらい珍しくないさ！俺もこの間手に入れたし。

「ふっ……」

「おねえさま？」

「期待してきたみたが…拍子抜けだな。ウルトラセブンが居る気配が一切感じられない」

「そうだな。どうやら当てが外れたらしい」

メフィラス星人がテンペラー星人に同意する。

「ワツハツハ！地球は我々のものだよ！」

「それはいいから少し静かにしろテンペラー」

「そうですよ。あとテーブルに足かけるの行儀悪いです」

俺達はテンペラー星人に注意するが、テンペラー星人は調子に乗っているのかどこ吹く風と言った風だった。

「わたくしのどこにもないですのーっ！」

ゴドラ星人もうるさい。そんな時だった、店の奥から店員らしき男性がハヤシライスをこちらに持って来た。

「ん…なんか少し似てないか…？」

メフィラス星人が言った通りその顔はウルトラセブンの人間態ことモロボシ・ダンに似ていた。そういえばウルトラセブンの人間態にはモデルが居たらしいけど、まさかな

…

「お待ちどう様。ハヤシライスです」

店員からハヤシライスを渡される

「いやいや、本物ならこんな所で給仕係なんてしてないだわよ」

それもそうかな……？ハヤシライスを食べることにしよう。

「ハハハ、飛んで夏の火にいる虫とはこのことだ！」

「デユワ!!」

メトロン星人とゴドラ星人はカメラを回して何をやっているんだ？

「お姉さま私タマネギ嫌いです！」

「ワハハ！ひよつとすると毒が入ってるかもしれないだわよ」

ちよつテンペラー星人なんてこと言うの！

流石に俺が注意しようとするのとハヤシライスを持つて来た店員が、

「うるさい!!食べろ!!」

と一喝した。それで皆さつきまでの喧騒が嘘のように黙ってしまった…凄いだつた…心なしか資料のウルトラセブンの掛け声を想起してしまった。

その後、ハヤシライスを食べ終えた俺達は、特に騒いでいた組は恐縮して店を後にしようとした。その時だ、さつきの店員さんが出てきて

「さつきは怒鳴って悪かったね」

と言つてきた。

「いや、うちの連れがすみませんでした……」

とこちらでも謝つた。どう考えても店内で騒いだこちらが悪いだろう。

店員さんは

「……君たちはどこか遠い所から来たのかな。旅先でハメを外したい気持ちもあるだろうけどその土地で礼を欠く様なことはしてはいけないよ。大人しく食べてくれるなら大歓迎。是非またいらつしやい」

と忠告してくれた。これで、テンペラー星人達も少しは大人しくなってくればいゝんだけど。

去る時、彼に

「失礼ながら……薩摩次郎。この名前に聞き覚えは？」

と聞いた。

「……懐かしい名前だ。どこでその名前を？」

「その、俺の先輩から聞いた名前なんです。彼のことは忘れられないと」

「そうか……もしその先輩に会ったらこう伝えてくれ。モロボシ・ダンのことを忘れることはない」と

「はい」

これはあの人への伝言ということではないのか…？ エライことを聞いてしまったかも…？

俺は彼に一礼して皆の元へ向かった。

6話 怪しい隣異星人

その後、俺達はレッドキングと合流できた。その時メフィラスの様子が何やらおかしかった様だが、何かあったのだろうか？そして地球で生活していくに当たって当面の住居を探すことになったのだがなにせこの大人数である、中々良さそうな住居は見つからない。俺達が困っているとレッドキングが、

「じゃあさ、オレが今厄介になつてゐる棟梁のおやじさんに頼んでみるか？」

と提案してきた。なんでもレッドキングが地球に残つた際に野宿していたのを見かねて居候させてくれたらしい。それで今そのおやじさん関係の現場の仕事を手伝つてゐるんだとか。取り敢えず他に当ても無いので俺達はそのおやじさんの家に行くことにした。

「ただいまー」

レッドキングが居候するアパートに着き、レッドキングが呼びかけるが、件の夫妻は出かけているのか反応が無い。それでレッドキングの部屋に上がる事にするがよく片付いている。なんかこの家、既視感があるような…。

そんな時、レッドキングが庭で犬を連れた人物を見つけた。

「おやじさーんー！」

「おーレッド君帰ってきてたか。ん？ずいぶんにぎやかそうじゃないか」

あの初老の男性がレッドキングの言うおやじさんらしい。

「ああ!?!あのひとは!」

メトロンが反応したけどどうしたんだろう？　メトロンがおやじさんに駆け寄ると話し出した。話を聞くとどうやらかつてメトロンの基地を建てた時の棟梁がそのおやじさんだったらしい。世間は狭いと言おうか。なるほど先ほどの既視感も怪獣墓場のアパートで寝泊まりしていた身があのアパートのモデルとなった地球のこの家を錯覚したのだろう。

そんなこんなで俺達はこのアパートに格安で住まわせてもらうことになった。

「いやあ地球人って色んな人が居るって聞いたけど、ここの棟梁さんは随分心の広い人ですよ。いきなりこんな大勢で居候させてもらって」

「そうですね。アパートだとは言え9人も押しかけちゃったのに…それも私達が宇宙人と知ってる事ですからね。まあ私やレッドさんは元々地球の出身なんですけど」

ツインテールが同意する。さて、部屋の割り振りとかはどうなるのだろうか？この間のネットカフェは緊急時だったからしょうがないとして、流石に女子と同じ部屋で寝るのは如何なものだろうか。ともすると自分の部屋は単独かそれとも棟梁さんの寝室辺

りになるのか。そんなことを考えながら窓の方を見ると、メフィラスとテンペラーが外を見ていた。

「メフィラスさん、テンペラーさん何か見えるんですか？」

「見えるも何もお前も隣の家を見るだよ」

「隣？」

自分も窓の外の隣家を見る。すると隣家の窓から一人の人物が椅子に座っているのが見えた。

「あの人はどうしたんです？」

「お前この邪気に気づかないのか？明らかにやばい雰囲気になってるだろ」

「そうですかね？ていうかあんまり覗くとプライバシーの侵害つてやつになるんじゃないやあ……!？」

その時、後ろを向いていた隣家の人物がこちらを向いた。大きな耳のようなものが付いた女性だった。その女性と目が合った時、身体がブルつと震えた。これは殺気か？あの女性は人間ではないのか？

「い、今は……」

「やつと気づいたようだな鈍感。アイツ……まさかイカルス星人か？」

「そのようだわね」

イカルス星人。嘗てウルトラセブンが地球で戦った異星人の1体で、確かにあの耳はそれっぽいがああ姿は……

「まさか俺たち以外に怪獣墓場から来てる人が居るんですか!？」

「聞いたことがある……かつて怪獣墓場を抜け出した生徒が一人いると、学校側は事実を隠蔽してるけど、地球に行つたんじゃないかって噂されてただわよ」

「それがアイツか……」

「地球に残つていたのはレッドキングさんだけじゃなかった……」

明かされた新事実に驚いていると、レッドキングが庭で棟梁夫妻が飼っている犬「マリ」が空中で止まっつているのを見つけ、レッドキングがその場に飛び出したらレッドキングの姿が消えてしまった。そのまま放つておく訳にも行かないので俺達は隣家に行つてみることにした。

「ここが玄関だわね」

表札には「伊刈」と書かれていた。……そのまますぎないか？

「おい、開くぞ」

「鍵掛かつてないんですね」

「案外抜けてる奴なのかも……」

「でも罨だという可能性も……」

「あつー！」

「うっこれはー！」

後ろを振り返ると景色は一変していて、とても地球上の景色とは思えない場所に俺とメフィラスは居た。そして背後に気配を感じて振り返るとイカルスが居た。

「来たな。馬鹿な奴らだ」

「お前…地球で何をしている」

「私は、この四次元の世界から地球を侵略する。地球人はこの世界を攻撃することはおろか見ることもすらできない」

メフィラスやテンペラーの様に侵略の意思があるのか…！

「侵略か…ならば、我々と同じ目的だな。仲間になれ」

メフィラスが勧誘する。見張らなければいけない対象が増えそうだ…

「ハッハッハッ！仲間だとそんなものはいらん。この地球は私一人のものだ！バカはうせろ!!」

「何だと！言わせておけば…！」

メフィラスが光線を発射する体勢に入るが何も起こらない。どうやらこの空間では俺達の行動は制限されているようだ。

「四次元の力を見せてやろう…」

イカルスの言葉と共に地球の都市の映像が出る。その中心に写っているのは確か東京タワーだったか、稲光が走ると東京タワーが破壊される。

「お前々々無意味な暴力はやめろよなーっ」

自分の美学とは反するのかメフィラスが食って掛かった。

「はあ？何を言ってる、侵略とはこういうものだろう？」

「一方的な暴力は俺も嫌いです。故意の破壊行為、見逃す訳には行きません！」

自分も見習いとは言え、宇宙警備隊の末席に居る者である。イカルスのこれ以上の暴虐は見過ごすことはできない。

「ふん、正義を気取ってもこの空間に居る限りお前たちは……」

「コラー!!」

その時レッドキングがこちらに走ってきた。彼女もこの空間に来ていたようだ。

「レッドキング!!」

「レッドキングさん!?!」

「このヤロー、いい加減にしやがれ！」

レッドキングは辺りを見回す。

「何だこゝは！丸いものばかりでぶん投げたくなるじゃねーか！」

そしてレッドキングは空間内に浮かぶ球体の一つを掴み、

「フツ無駄だ……ここではなにもふぶ！」

イカルスにぶつけた。

「な……なぜだ。この場所はあらゆる力学も無になる空間……なぜ物理攻撃が出来るのだ！」

イカルスは優位性を崩されたせいも動揺しているようだ。

「ほんとにどうやってレッドキングさんは？」

「そんな難しいことわかるかーっ！」

「バカだ……バカには法則が通用しないっ！」

レッドキングはイカルスに向かって次々と球体を投げつける。その内の一つがイカルスの傍にあった機械を破壊する。

「やつやめなイカ！」

すると景色が普通の町に変わり、巨大化したイカルスが尻もちを付いていた。

「ちよ……何なんだわよ!?!」

「メフィラスちゃん！レッドキングちゃん！」

「ロメオさん！」

テンペラーたちも合流していた。どうやらこの騒ぎを聞きつけていたようだ。

「くそ……っ長年に渡る計画を……許せん!!」

イカルスは相当に怒っているようで敵意を込めた目でこちらを見下ろしてくる。

「こうなったら、全員踏み潰してやる！」

「キヤーー！」

イカルスはこちらを踏み潰そうと足を向けるがそうはいかない。俺は全身に力を込めた。

「ロメオ変…身!!」

「!」

元のウルトラ族としての姿になった俺はイカルスの足を受け止めそのまま足を押し戻した。

そしてイカルスと対峙する。

「お前…ウルトラ族だったか！」

「そうです。ウルトラ族として貴女を止める！」

「ハッ、緑色のパチモノみたいな奴に私が止められるか！」

足元から声が聞こえる。

「ロメオー、奴のアロー光線に気をつけるだわよー当たると焦げ…」

「イカーツ」

イカルスがアロー光線を放つ。こんな時は…

「ウルトラバリアー！」

自分の前方に光の壁を張って光線を防いだ。だが、

(うっ、プラスマスパークの恩恵がない場所で技を使うと、こんなに消耗するのか…)

今現在の俺の身体にはカライタイマーが取り付けられてはいないが、仮に付けていたら既に点滅してもおかしくない消耗をしていた。

宇宙警備隊員養成所でも教官たちは光線のむやみな使用は控え、近接戦闘で相手を弱らせてからと言っていた。何度も光線を使われるのはまずい。エネルギー消費の少ない肉弾戦に持ち込まなければ。

「ジャッ！」

イカルスの元に突っ込みチョップをお見舞いする。

「ハッ！」

イカルスも負けじとこちらの身体にパンチを打ち込む。

「ぐ…」

「む…」

お互いに距離を取る。

「お前…ウルトラ族なのに怪獣墓場の連中と行動を共にしていたようだが何が目的だ？」

「成り行きと、この世界でできた友人の為に来ただけです。貴女こそ、なぜ怪獣墓場を離れたんです？あそこは住みやすい場所だろうに」

「はっあんな牙を抜かれて飼いや慣らされた連中ばかりの場所など！私はな、他の連中と違って侵略の意思と貴様らウルトラ族への恨みは忘れていない！」

そう言うといカルスはこちらに突っ込んできた。

「どうしてもやるんですか！」

「黙れ！」

またも殴り合いになる。こちらでも消耗している。だが、レッドキングの様なパワーアップと違ってイカルスの様な相手であれば！

「訓練生を、舐めるなあ！」

「チィ！」

放たれたイカルスの蹴りを片手で掴み、力任せに投げ飛ばす。

「グオツ!？」

そのままマウントポジションを取り、

「降伏してください！さもないと…」

「クツ……甘い！」

イカルスが叫ぶと同時に、アロー光線の発射体勢に入る。まずい、こうなったら…

「テレポーターション!!」

俺は咄嗟にイカルスの直ぐ側から少し離れた地点に瞬間移動する。

「イカーツ!」

そしてアロー光線はイカルスの真上に放たれ、

「しまっ……」

そのまま発射をしたイカルス星人の元に降り注いだ。

「イカカカカ!? 私自らのアロー光線でえ!」

アロー光線で自滅したイカルスはそのまま縮んでいく。どうやら戦いに勝ったようだ。

俺もヒューマノイド態に戻る。というかももう地球上で巨大な身体を維持するのが限界だ。先輩方はいつもこんなに体力を消耗していたのか、それとも俺の鍛錬が足りないのか、なんにせよ前に変身した時の様に、いやそれ以上に俺の身体は疲労感に包まれていた。

「ロメオさーん」

ツインテールたちが駆け寄ってくる。他にも何か言ってるようだが聞き取れない。今は兎に角休みたい。

「すみません。皆さん後は頼みます……」

俺の意識は遠のいていった。



——SIDEメフィラス星人——

「おっと」

倒れ込もうとするロメオをレッドキングが受け止める。

「ロメオさん!？」

「あれ？ロメオ君寝ちゃったの？」

ツインテールとエレキングが真逆な反応を見せる。

「どうやら気絶したようだな」

「光線技こそ使っていないけどテレポーテーションしたのがかなり効いたようだわよ」
遠くでサイレンが鳴っている。先ほどの戦闘で大騒ぎになっているようだ。

「早いとこ撤収した方がいいんじゃない？ロメオ君も休ませないといけなみたいだし
ね」

メトロンが提案する。まあその方がいいだろうが、

「その前にやることがある」

私は巨大化すると、さつきイカルスが破壊した東京タワーに向かい、折れていたタワーを元の通りに直した。

「これで良し」

元のサイズに縮小して皆の元に戻ると、イカルスも来ていた。

「——フン、折れた東京タワーを直すとは手ぬるいな偽善もいいところじゃないか。結局は侵略するんだらう？」

「黙れ、時代は変わったんだ現代には現代の侵略の仕方、怪獣の在り方がある。私は私のやり方で地球を奪う」

私はイカルスを睨みつける。

「……その目、お前は他の奴らと少し違うようだな。半溶解種……か」

……半溶解種？

イカルスはいきなり駆けだした。

「あっ」

「覚えてろよ！バーカバーカ！」

そしてその辺にあった自転車を奪って逃げていった。